

冬の乾いた空気の中に色とりどりのイルミネーションが光り輝いている。藍色の夜空に散りばめられている星々に負けじと輝くその姿は、どこかやはり人工的で、金平糖のように思えた。甘味料たっぷりな甘いイルミネーション。星空と同じくらいに澄んだ笑顔を浮かべながら行きかう様々な年齢の人たちは、空を見上げることなく、その甘いイルミネーションを眺め、心を躍らせる。けれど星々はその人間の愚行に対して怒ることはない。それらは年に一度の奇跡が集まる日であるクリスマスには、まるで神様のように温かく見守ってくれているのだから。だからクリスマスは星々の休息でもあり、月の休日である。はたしてそれらは僕たちのような人間を見て何を思うのだろうか。街々に蔓延る幸福を眺めているだけで、満足なのだろうか。ああ、そうか、クリスマスのキセキってやつはきつと、空が見ているだけで満足しきれなかったときに飽和して溢れ出た何かなのだろう。溢れだした何かは自然に俺たちに降り注ぎ、心を満たして、まさに奇跡を生むみ、このクリスマスという特別な日を馬鹿みたいにはしゃぐことが出来るし、誰か好きな人と愛を語ることもだつて出来るんだ。俺たちは空に感謝をしなければならぬ。この、クリスマスという素晴らしい日を作ってくれた空たちに感謝と祝福を。

閑話休題。

そんな俺はサンタさんに——いや、クリスマスの空に願う。

妹をください、と。

「冬馬はサンタに何お願いすんだよ？」

厳しい寒さが襲いかかり、耳を赤く染める中、登校中の友人が俺に問いかけてきた。

「サンタにお願いするっていう年でもねえだろ」

「何言ってるんだよ、俺たちまだ十六歳だぜ？ 十分ガキさ」

馬鹿馬鹿しい。

どの世界に高校生にもなつてサンタを信じて夢を見てるやつがいるのやら。

まあ、俺はサンタなんて信じちゃいないが、空は信じているんだなこれが。

そんなこととても言えないけど。恥ずかしすぎる。なんだよ空を信じるって……厨二病もいいたところじゃないか。

「あー！ 明日のクリスマス、せめて彼女がいればなー！」

「どんまー」

「るせー！ お前も独り身じゃねえか！」

確かに。

「俺はいいんだ。彼女なんていらねーし」

そう、俺には——妹がいればいいのだから。

俺が妹萌えだということは高校の奴らには秘密だ。

そんなことがばれたら俺はその日から学校で生きていくことが出来ないからな。

「ちくしょー！　ところで冬馬」

「なんだよ、いきなり」

「明日のクリスマス暇か？」

「なんだよそれ、誘ってんのかよ？」

マジ勘弁。

「ちげーよ！　いや違くねえけど。暇ならみんな集めてクリスマスパーティーでもしないか？」

なるほどそういうことか。最初からそう言えばいいものの。

「わりいな。クリスマスはバイトなんだ」

もちろん嘘だ。

けれど、忙しいという点では本当だ。

「そっか。じゃあしやーねーな」

友人は寒みー寒みー、言いながら背中を丸めて小走りになった。

そんな、なんでもない朝の風景。

早朝の青空を見上げると、うっすらと輪郭をなぞりながら月が顔を出していたが、星は一つも見えなかった。それでも、空は空だ。いつまでも、これからも、ずっと。

はあ。

吐いた溜息は真っ白な煙となって、俺たちの憂鬱を表しているみたいだった。

今年のクリスマスも——忙しくなりそうだ。

クリスマス当日。

俺はイルミネーションの飾り付けも何もない、近くの真っ暗な公園へと訪れていた。例年通り親に内緒で出てきたので、帰ったら怒られることは間違いないのだが、今は、今日はそんなことどうだっていい。

ベンチに座って藍色の空を見上げながら白い息を吐いた。俺の視界は——世界は白で染め上げられ、けれどそれはあつという間に藍色へと、空へと戻る。

「兄さん」

ゆっくりと俺はベンチの隣からする声に首を向ける。その動作は本当にゆっくりとしたもので、今までの軌跡をなぞり上げるかのようなものだった。

ベンチには黒い髪をなびかせ、赤いコートを着ている少女が座っている。幼い顔の大きな瞳の横には小さな泣きボクロがあつて、口元は冬場なのに潤っており、非常に可憐だ。

ああ。

今年も——願いが適った。

「お帰り、空」

俺の最愛の妹は——今年もクリスマスだけ、帰ってきた。

近くの自動販売機で買ってきたコーンスープが二人分。俺たちはそれを凍えた手を温めるように、大事そうに抱えて持っている。

「元気にしてた？ 兄さん」

桃色の唇から吐きだされる言葉と白い息はどこか夢物語のようで、現実味を帯びていない。けれど、今のこの寒さと、缶の温かさが現実だということを認識させてくれた。

「もちろんだよ。空は？」

「うん。私も」

「本当かよ」

俺の乾いた笑いは、冬の空気と通ずるものがあつた。

「ねえ、兄さん。私がいなくて寂しかった？」

そう陽気な声色で言った空は、俺の肩に寄りかかってくる。

服越しから感じる空の温かさは——彼女が生きているということ強く、強く実感する。寒さのせいなのか、それとも空のせいなのかは分からないが、顔を熱く赤く染めた俺は、

隣を一瞥——

空の瞳は、涙が零れそうなくらいに、綺麗な雫で濡れていた。

「寂しくないわけないだろ」

だから俺は笑えない。

いくら空がこの場を明るくものにしようと思って言った発言でも、俺は、今の空を見てしまつたら、笑ってやることなんて、出来ない。

「そっか」

雫がこぼれないように上を向く空は、やはりまだ子どもで、いつまでも、子どもで、俺の大好きな、たった一人の妹だ。

「今年も父さんや母さんには会っていかないのか？」

「うん。ごめんね」

どうして合わないのかまでは言わない空。

「謝ることじゃないだろ、別に」

会えないということは、馬鹿な俺でも簡単に察することの出来ることだったので、それ以上追及することもない。

「——兄さん」

今にも枯渇しそうな空の声を耳に焼き付けた俺は、

「何？」

って、空の方を向こうとする。
けれど。

俺は空に抱きしめられた。

俺も空を抱きしめた。

強く。

絶対に離さないように。

もっと、強く。

壊れても構わないくらいに。

言葉は無かった。

ただ、温もりだけが残酷に横たわっている。

俺たちは、今までの空白の時間を埋めるように、静かに抱きしめ会った。

どれくらい時間が経過したのだろうか。

こうして温もりを感じている時間はたった数秒だったようにも思えるが、永遠の時の長さだったようにも思える。それら全ては戯言だが、俺は今この時を、永久に感じたいと、強く願っていた。

「もう、行くね」

耳元で呟いた空の声が、俺の涙腺を破壊する。

一年間溜めた涙が、溢れだす。

止まらない。

「気をつけて、行けよ」

空と俺の視線が混じり合った。

お互い雫を溜めて、溢れ、頬を伝って地面へと落ちる。

「笑って。兄さん」

「ああ」

温かな空の指が、俺の目元をなぞった。

笑って、見送らなければ。

笑って……。

「また来年会おうな、空」

「うん」

この世界に存在する何よりも美しい笑顔を浮かべながら、
光の粒子をまきちらしながら、
そっと、消え、

空は——空へ帰って行った。

「また来年、会おうな」

——またね、兄さん。

余談だが、空の命日にどこをほつつき歩いてたんだと、例年通り両親に怒られた俺は、もう既に来年のクリスマスの日のことを考えながら、

——ハッピーバースデー、空。

と、心の中で呟いた。